過去の行為を神聖化させるもの
――小川洋子「私の愛するノート」

東　海　義　仁

1　はじめに

小川洋子「私の愛するノート」（『博士の本棚』新潮社二〇〇七・七、新潮文庫二〇一〇・一、『精選現代文改訂版』（大修館書店二〇〇九・四）は、「自分」を支え、小説を書く原動力になっている「創作ノート」と「読書ノート」を「私」が愛するノートとしてを紹介するエッセイである。

エッセイの論理構成は以下の通りである。

「ノートが好きだ」という書き出しから始まるように、「私」がノートを好きな理由やノートをどのように使ってきたか、あるいは現在も使っているかが描かれる。

第一段落には一番たくさん使った時代として「私」の学生時代について描かれる。ここでは、「言葉の世界では、自分は自由なのだと感じることができる」、「十代の私の唯一の自己表現だった」、「いとおしい」という叙述からは、「私」のノートへの並々ならぬ思いが示される。

第二段落では「私」が社会人になり、主婦になった後の時期が描かれる。「創作ノート」を使い始めるまでの「私」は、ノートを使わない生活を「こんなことではたまらない」と思うほどにノートを欲している。「創作ノート」に「とにかく何かを書いてみた」ことが小説を書き始めたきっかけになり、「私」にとって「神秘的」である物語を生み出すのに「創作ノート」がいかに必要かが示される。

第三段落では「読書ノート」がとりあげられる。作家を励ます編集者の言葉と、作家が安堵した言葉の例によって、それが「私」を「物語の世界に戻」すために必要なものである。

このようにノートを中心に話題を進め、「私」が小説を書き始めるきっかけから、行き詰ったときに再び物語の世界に戻るまでの過程が描かれる。

しかし、本エッセイでは「私にとって物語の存在は、いつも神秘的だ」と語られ、また指導書ではその叙述をもとに、日常生活が神秘にあふれていることを伝えようというねらいが立てられている。そこで、本稿では「神秘的」という言葉が指示す

る対象は何か、また、その叙述から日常生活に神秘があふれていることを伝えることは可能なのかを検討する。

2 「私」にとっての神秘

指導書の「学習指導のねらい」や「教材としての『私の愛するノート』」の主張を検討しよう。

「学習指導のねらい」には「優れた筆者による随想は書き手の人生・精神などが、読み手にストレートに伝わっていく」としたうえで、「『書く』という行為が、ありきたりな日常を見つめ直し、日々が『神秘』と『自由』にあふれていることを発見する契機となり得ることを、生徒たちに伝えたい[1]」と教材としての在り方を示している。

本エッセイは、「私」の「人生・精神」を喚起する随想である。十代の「私」にとってはノートが唯一の自己表現の場であり、その頃の経験は社会人になってからも引き継がれ、ノートがない生活を「こんなことではたまらない」と思う。これはノートを通して言葉の世界に入ることで自由を感じ取る「私」だからこそ思い至るものであり、「私」にとってはノートがない生活はたまらないと感じるように不自由である。

また、「私にとって物語の存在は、いつも神秘的だ」というように、「私」にとってはノートが見苦しく混沌になるほど小説の第一行目が書き出せるようになり、物語がどのようにやってきたのかが書いた本人にさえ「実感がつかめない」点で、「私」はそれを「神秘的」と表現する。

しかし、それはあくまで「私」のもつ感性である。「私」がノートを通して言葉の世界に入り自由を感じたり、ノートに書くことで生まれた物語に神秘的だと感じることを、読者それぞれの「日々が『神秘』と『自由』にあふれていることを発見する契機となり得る[2]」までにはかなりの距離がある。

「私」という登場人物がもつ「神秘」や「自由」の例を読み取ることと、それが読者それぞれの「神秘」や「自由」になることとは異なる。しかも、「私」は書くことを職業にするように、書くことと密着している存在であり、「私」の例は特殊な例である。まして「『秘密ノート』を持つことが、自己を客観的に見直すことにもつながることを[3]」教えるわけではない。

本エッセイは「私」のノートへのこだわりが示される。「私」にとってノートは自由を感じるものであり、自己表現の場であり、そしてなによりも言葉の世界に入るためには必要不可欠なものである。「私」が小説を書き始めるきっかけから、行き詰ったときに再び物語の世界に戻るまでの過程がノートを通して描かれているが、言い換えればノートなしには「私」のそういった精神を語ることはできないことになる。

しかし、言葉と一切向き合わないで生活することは不可能に等しいという意味で、言葉の世界に入ることは誰もが行うことであり、自己表現の場を確立することも生きるうえで必要である。だから「私」の例を理解したうえで、自分自身の言葉の世

界への入り方や自己表現の場を見直さなければならない。それはノートに書くことに限らず読者一人一人によって異なるはずである。

注意しなければならないのは、「私」にとってのノートが特異なものとして描かれていることと同時に、ノートは誰にとっても身近なものとして存在しているということである。ノートが誰にとっても身近なものであるが故に、「私」のノートへの固執さえもが身近な例とされているが、あくまでそれは作家である「私」のケースを示している。

3　神秘的なのは何か

「私にとって物語の存在は、いつも神秘的だ」とは、比喩的な表現である。これは「そういうものたちに彩られた様子は、どこか秘密めいて、いとおしい」という叙述とも重なり、「私」が物語やそれを生み出す土台になるノートのことを神聖化している。

一方で、「私」は「ちょっとした閃きを書き留めたり、気になる新聞記事を貼りつけたり、舞台となる家の間取り図を描いたり」、「あっちを消し、こっちから矢印を引っ張り、そこは重要だから蛍光ペンで囲み、あそこは伏線となるシーンを付け足し」といった具体的な作業を思い起こせている。それにも関わらず「小説の第一行めが書き出せる」ことを「物語がやってくる」と捉えている。

改めて確認すれば、「私」にとってノートは十代の頃から変わらず自己表現の場であり必要不可欠なものである。そして、自分が自由であることを実感できるものであり、自分を物語の世界に戻すために必要なものでもある。しかし、それだけでなく、ノートを通して自己表現したり何かを書いたりした痕跡を見つめ直すこともできるのである。

本エッセイでは物語を創作している最中の視点と、それを後から見つめ直した時の視点とが混交している。物語を創作している最中の「私」は「ちょっとした閃きを書き留めたり、気になる新聞記事を貼りつけたり、舞台となる家の間取り図を描いたり」、「あっちを消し、こっちから矢印を引っ張り、そこは重要だから蛍光ペンで囲み、あそこは伏線となるシーンを付け足し」たりと、確実に一つ一つ物語をつくる手順を踏んでいるため、その作業が進めば進むほどに作品が煮詰まり、作品が煮詰まればその書きはじめや書き終わりがイメージできてくるのは当然のことだろう。それは紛れもない創作作業そのものであり、決して不思議なものではない。作業が進むにつれ「ページはどんどん見苦しくなってくるが、心配はいらない」とあることは、決して創作作業が宗教的な儀式の役割を果たし、その結果神秘的な力が作用して物語ができることを「心配はいらない」と言っているのではない。「書き手の思惑を越えた光が射す」という叙述は、それまでの創作作業やその結果として存在する色々と書き込まれたノートを、後から見つめ直した時の視点から語ら

れたものであるからである。物語を創作している最中には、その本人はノートが見苦しくなっているなどとは思わないだろう。それらの行為は自らの思考を整理するためになされている。「私」は確実に創作作業を一つ一つこなしているのであり、その作業の量や質が最初から目途が立っていないにしろ、創作作業をしている最中の視点では、きちんとした筋道を通って物語の書き出しに結びついているのである。自分がきちんとした創作作業のうえで生み出したものという実感は、「自分にしか書けない何か」という一文に表れている。

そうであるなら、「私」が神秘的だと神聖化しているのは過去の自分の創作行為とその土台になったノートであると言える。物語を創作している最中の視点は、その物語が完成してしばらく経った段階で「私」から失われる。そしてその物語が完成するまでの痕跡が、創作作業の過程がないままにただの痕跡として残っているノートを見ると、その時点で「私」はそれを神秘的だと思ってしまうのである。創作作業の最中にはノートは思考を整理するためのものとして機能したが、ノートはその整理する過程を残すことはできない。あくまでそれらの過程が統合されて痕跡となっているだけである。そういったノートの性質が「私」に過去の自分の行為を神聖化するのを助長している。

註

(1) 無署名「小川洋子「私の愛するノート」」(『精選現代文指導資料』大修館書店二〇〇八・四)一九頁。

(2) 注1に同じ。

(3) 前掲「小川洋子「私の愛するノート」」二二頁。

(とうかい・よしひと　富山大学大学院生)